

和傘が照らす人の心

電球備え デザイン照明に

「照明ですが、つくるための技術はほぼ和傘と同じです。竹の骨組みと和紙が織りなす繊細な美しさはそのままに、持ち運びの際に折り畳むこともできる。京都で160年続く和傘の老舗「日吉屋」の5代目、西堀耕太郎さん(44)が筒型のランプの明かりをつけると、心がなごむ柔らかな光に包まれた。

ユニークな和風のデザイン照明「古都里」は、日吉屋が欧州やアジア、中東など世界15カ国で展開している人気製品だ。外資系の高級ホテルや海外の富裕層からのオーダーメイドにも対応し、洋の東西を問わず高い評価を受けている。現在、売り上げのほぼ8割を照明などインテリアが占める。

江戸時代に町民文化を彩った和傘は、最盛期には全国で年間1700万本がつくられたともいわれる。だが、戦後には機能性に優れた洋傘に押され廃業が相次いだ。かつて京都市内で200軒に上ったという製造元も、今や日吉屋の1軒のみとなっている。

西堀さんはもとは伝統工芸と縁遠く、生まれも育ちも和歌山県。前職は公務員だが、妻の実家が日吉屋だったことで運命は変わった。番傘の渋さ、伝統美が生み出す格好良さに魅せられた。

「古都里」はホテルや海外の別荘向けなど、オーダーメイドの注文にも対応。色彩も様々だ(京都市中京区のホテル ザ・スクリーン)



興味本位で制作を手伝いはじめ、ついには当主を継ぐことを願いだした。「店は廃業寸前で反対されました。でも、京都で和傘をつくる場所がなくなるのは大きな損失だと思ひまして」

ある晴天の日。寺の境内で、油をひいた和傘を天日干ししている時に照明の着想を得た。傘の下から見上げると、和紙から透ける陽光が美しい。「これだ」。竹骨が生む陰影など日本らしい光の空

間を前に、直感が働いた。

試作品は和傘に電球を取り付けただけのタイプ。都内の展示会では「美しい」と賛辞であふれたが受注には至らなかった。「現代の生活で『どこで使うの?』ということ。技術を見せたい思いを押しつけただけでした」

そこで、照明デザイナーに協力を求めた。受け取った図面には円筒のランプが描かれ、虫かごのように当初は気は進まなかったという。だが、結果は予想に反し、都会的な空間にも合うデザイン性がバイヤーの目に止まり、2006年に古都里が誕生した。

08年にはフランスとドイツで開かれた世界的なインテリア見本市に参加した。「欧州では小さく、明るすぎる」「日本の伝統色が強い」。様々な要望に向き合い、素材にステンレスを採り入れた製品も制作。職人技や和傘の歴史の物語性などの魅力をアピールしながら変化を柔軟に受け入れる。「工芸の感動を呼ぶ価値を大切にしつつ、日常で使える物に戻らなければ生き残れない。例えば、昔のフランス貴族の服がいくらか素晴らしくても自分で着たいか」と話して別。それと一緒です」

老舗を立ち直らせた体験を生かし、最近では伝統工芸の再生を手掛ける分野でも活躍する。漆器や友禅の職人を欧米のバイヤーやデザイナーにつなぐことで、海外のニーズを捉えた個性的なヒット製品が生まれた。中には高級ブランドから受注した例もある。

西堀さんが掲げるのは「伝統は革新の連続」という哲学だ。奈良時代の頃、和傘は魔よけや儀式の道具に使われていたという。やがて用途は雨具に、そして開閉式に変わった。「先達は進化のための努力をしてくれました。和傘もやっぱり雨傘として使いたい。もう一回」。職人として次なる和傘の可能性も捨ててはいない。

佐藤淳一郎
吉川秀樹撮影



「日吉屋」5代目、西堀耕太郎さんは和傘をデザイン照明に生まれ変わらせた「古都里」を開発。税別2万3千円から